岡山における連母音の融合状況―多人数調査から見る―

尾　崎　喜　光

1. はじめに

筆者が本学で担当する「日本語学基礎演習」では、研究対象とする言語事象を各期ごと筆者があらかじめ定め、それに関連する先行研究を調べて報告する班、アンケート調査を企画・運営する班、自然談話調査を企画・運営する班に受講者を分け、身のまわりで使われている表現についての調査研究を総合的に体験させている。

2010年度の第2期（後期）の授業では、連母音の融合現象を研究課題として取り上げた。本来の日本語の音節構造は「子音1個＋母音1個」であり、これを繰り返すことで語形が構成されていた。しかしその後、語中の子音が脱落する「音便」という発音上の変化が生じたこと、また隣国の中国から漢語を取り入れた際に原語に近い音すなわち漢字の音読みで取り入れたことから、母音が連続して現れる音節構造が生じた。前者については、たとえば「書きた（り）」が「書いた」、「赤し」が「赤い」と変化したことで［ai］が生じた。後者については、たとえば「大工」という漢語を取り入れたことで日本語に［ai］が生じた。このような、子音を挟まずに母音が連続するものは「連母音」と呼ばれている。現代日本語の主要な連母音には、［ai］の他、［oi］と［ui］がある。

ところが近世になると、東国方言ではこの発音をさらに変化させて［ai］［oi］を［e:］、［ui］を［i：］と融合して発音するようになった。現在もその発音が行なわれている地域は少なくない。そうした地域では、「赤い」は「あけー」、「大工」は「でーく」などのようになる。同様に「太い」は「ふてー」、「寒い」は「さみー」などとなる。こうした現象は「連母音の融合」と呼ばれている。上野善道編（1989）に掲載されている言語地図によると、近畿地方やその周辺の四国地方・北陸地方では融合させずに連母音のまま発音する地域が比較的広く分布しているのに対し、それ以外の地域ではむしろ融合させる地域が広く分布している。本授業で研究対象とする岡山県を見ると、県北東部（美作）は近畿地方からの連続として融合させない地域が多いが、それ以外（備前・備中）は融合させる地域が多い。

岡山県、中でも本授業で調査対象として意識した県南は基本的に融合のある地域である。学生たちの会話を聞いていても、「すごい」を「すげー」、「寒い」を「さみー」とする発音はごく日常的に聞かれる。これに対し、「大根」を「でーこん」、「大学」を「でーがく」、「大分（だいぶ）」を「でーぶ」と融合させる発音はまず聞かない。特に「でーこん」は、岡山の発音上の特徴を象徴的に表わす「でーこんてーてーて」（大根を炊いておいて）というフレーズとして使われるほど知られているにもかかわらず聞かないのである。

こうした状況から推測されるのは、形容詞は現在でも融合形が盛んに使われているのに対し名詞は融合形があまり使われていないというように品詞による違いを伴いな

がら、現在岡山では融合形の使用が衰退しつつあるのではないかということである。

そこで本授業の調査では、品詞の違いや話し手の年齢層の違い等にも注目しつつ、連母音の融合形の使用状況を調査した。本稿では、このうちアンケート調査で得られた結果を報告する。

2. アンケート調査の概要

2.1. 実施時期・回答者

音声に関するデータは、調査者が実際に回答者の音声を聴いて得ることを本来とするが、具体的な語について連母音を使うことがあるか否かについての内省は回答者が十分できるものと判断し、自記式のアンケートにより回答を得ることとした。

調査は 2010 年 11 月から 12 月にかけて行った。

調査票の配布・回収はアンケート調査班 5 名が中心となって行った。データ収集の実現可能性および「基礎演習」として行なう調査であることを考慮し、回答者の求め方は、協力が得られやすい個人ルートによる有意抽出とした。また、同様の理由から、回答者の居住地の条件についても、本学のある岡山市やその周辺だけに限定せず、岡山県内であれば可とした。

こうした方法により回答者を得たため、そもそも岡山県のどの地域を母集団として想定する調査であったかが明確ではない。また、人口比に応じた県内の地域ブロックからの量的代表性も確保されているわけではない。さらに、年齢層別の量的代表性も確保されてはいない。従って、この後に示す調査結果の数値自体は、じつは岡山県の状況を正確に表わすものであるという保証はない。しかしながら、回答者を数百人のオーダーで確保できたことから、品詞による傾向の違いや、同じ品詞内での数値の序列関係については、こうした方法により得たデータであっても一定程度の確からしさをもって言えるところがあるものと判断し、本稿で報告することとした。

回答者の総数は 575 人である。

性別内訳は次のとおりである。男女比に極端な片寄りはない。

男性：305 人
女性：268 人
不明：2 人

年齢層別内訳は次のとおりである。高校生以下の若年層が 85% と大きな割合を占めており、本稿での報告は岡山県の若年層を中心とするものであると言える。なお、高校生以下の男女比には極端な片寄りはない。

小学生：181 人（男子 86 人、女子 95 人）
中学生：156 人（男子 76 人、女子 80 人）
高校生：153 人（男子 90 人、女子 63 人）
20 ～ 30 代：27 人（男性 17 人、女性 10 人）
40 ～ 50 代：50 人（男性 34 人、女性 16 人）
60 代以上・不明：8 人（男性 2 人、女性 4 人、性別不明 2 人）

2.2. 調査方法・質問方法

回答者には、たとえば「でーく（大工）」のように、通常の表記を括弧内に添えた融合形をひらがなで提示し、ひとつひとつの語形について回答者自身が「使う」か「使わない」かの二者択一で回答を求めた。会話の相手は想定させなかったが「普段」を想定させた。連母音の種類や品詞別に138の調査語をB4版2枚のプリントにまとめ、これに調査の趣旨説明および回答者の属性（性別、年齢、職業、最長居住地［都道府県レベル］）について回答を求める欄を設けた用紙1枚を加えて調査票とした。語の選定にあたっては、筆者の研究指導を受けつつ首都圏の大学生399人を対象に2005年にアンケート調査した聶星超（ジョウセイチョウ;2006）の調査結果も参照させた。

3. 結果と考察

以下では、品詞別、連母音の種類別に、融合形を「使う」と回答した人の割合、すなわち融合者率をグラフ化して示す。各グラフ内での並び順は、数値の高い順とした。

3.1. 形容詞の連母音［ai］の融合

形容詞の連母音［ai］を［eː］とする発音を「使う」と回答した人の割合（融合者率）は図1のとおりである。

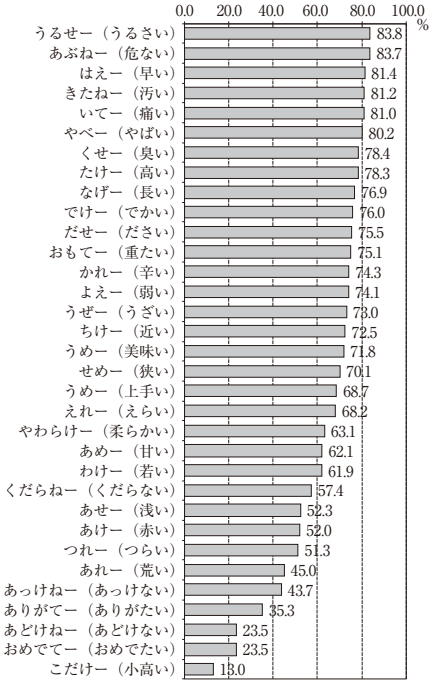

図1　形容詞の連母音［ai］の融合者率

この後に示す名詞や動詞などと比べ、融合者率は全般的に高い。本調査の回答者には若年層を多く含むが、そうした若年層においても、形容詞の［ai］を［e：］と融合して発音する人の割合は比較的多いことがわかる。

なお、他の品詞との対照の便宜上、ここでは「形容詞の連母音」と呼んでいるが、形容詞で問題としているのはじつは語幹ではなく活用語尾の連母音である。厳密に言えば、たとえば「高い」の活用語尾は「い」であるので、「タカイ（高い）」を「タケー」とする発音は語幹末尾の母音を含む形での変化であり「活用語尾」という表現は不正確だが、ここではそれに準ずるものと考え「活用語尾」とする。

先に述べたように、形容詞は全般的に融合者率が高いが、その数値は語によりずいぶん異なっている。次にその要因を検討する。

埼玉県東部を中心とする 63 地点において、1990 年から 91 年にかけ 60 歳以上の生え抜き（男性が中心）を調査した吉田健二（1992）は、融合形を使う地点数は形容詞よりもむしろ動詞で多いことを報告している。名詞も融合形を使う地点数が少なくないが、その数は語により大きく異なり、語の使用度や生活上身近であるか否かという馴染み度が要因のようだとしている。そこで、本調査結果についても、各語がふだんの生活においてどれほど馴染みがあるか、すなわち生活の中での「日常性」という観点から、数値の異なりの要因を検討する。

図 1 で数値が最も低いのは「こだけー（小高い）」（13.0%）である。「こ（小）」の付かない「たけー（高い）」（78.3%）と比べると、数値は大幅に低い。客観的に点数化された資料等はないが、「小高い」は日常性がやや低い、多少詩的で上品な語と言えそうである。この語が持つ非日常性と上品さというニュアンスが、融合形が含意する生活密着型の日常性やぞんざいさと相反するため、融合者率が低くなっているものと考えられる。「あどけねー（あどけない）」（23.5%）についても同様の説明が可能であろう。「あっけねー（あっけない）」（43.7%）についても、上品さは特にないものの、現代では多少非日常的な語であるため、数値は相対的に低いのであろう。

一方、「おめでてー（おめでたい）」（23.5%）、「ありがてー（ありがたい）」（35.3%）の数値の低さは、語自体が持つ肯定的意味が、融合形が含意するぞんざいさと馴染まないためであろう。これと逆に、不快さという否定的意味を持つ「うるせー（うるさい）」（83.8%）が最も数値が高いのは、融合形が含意するぞんざいさと調和するためであろう。「きたねー（汚い）」（81.2%）や「くせー（臭い）」（78.4%）なども同様に考えられる。

このほか、語形という要因も考えられそうである。図 1 について、上記以外の語を数値の低い方から見てゆくと、「あれー（荒い）」「あけー（赤い）」「あせー（浅い）」「あめー（甘い）」のような、連母音の直前が「あ」である語が多いことに気づく。逆に数値が高い方には、直前の母音が「あ」であっても、「はえー（早い）」「たけー（高い）」「なげー（長い）」のようにア行以外の子音を持つ語が集中する。このように、子音を含まない母音「あ」（すなわちア行の「あ」）が直前に来る場合は、連母音の融合者率が低くなるという傾向が認められる。母音「あ」のみでは語幹として不安定であることが、活用語尾を変化させることを阻止している可能性などが考えられるが、現在のところ明確な理由はわからない。なお、調査票に並べた順序は五十音順ではないため、

心理学で言う順序効果はここでは考えられないことを付言しておく。

3.2. 形容詞の連母音［oi］の融合

形容詞の連母音［oi］を［e：］とする融合者率は図２のとおりである。［oi］についても、実際に問題にしているのは語幹ではなく活用語尾である。

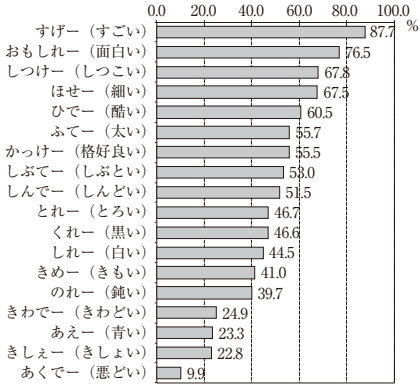

図2　形容詞の連母音［oi］の融合者率

先の連母音［ai］と同様、全般的に融合者率は高い。ただし、ここでも数値は語によりずいぶん異なる。

語の日常性という観点からまず検討する。数値が最も低いのは「あくでー（悪どい）」（9.9%）である。語の意味は否定的であるが、語の使用という点で考えると、それほど日常的に使う語ではなかろう。日常性が低いため融合者率も非常に低くなっているものと考えられる。「きわでー（きわどい）」（24.9%）も、日常的には「あぶないところだ」などの方がむしろ使われ、日常性がやや低いように思われる。「きしぇー（きしょい）」（22.8%）も数値が低いが、これは「気色悪い」を元とする最近の造語であることを考えると、別の意味で日常性がまだ低い語であると言える。数値は少し高くなるが、「きめー（きもい）」（41.0%）についてもこれと同様のことが言えよう。定着の度合が今後もし高くなれば、数値も高くなることが予想される。「きめー（きもい）」はまさにその過程にあるのかもしれない。

一方、数値が最も高いのは「すげー（すごい）」である。述語としてだけでなく感動詞的な用法としても、日常生活での使用頻度は高いと考えられる。そうした日常性の高さが、融合者率の高さとなっているのであろう。

語形の観点から検討すると、直前が子音を含まない「あ」である「あえー（青い）」（23.3%）の数値の低さが注目される。連母音［ai］で観察された傾向が、連母音［oi］でも見られる。

調査語の中には「おもしれー（面白い）」（76.5%）と「しれー（白い）」（44.5%）が含まれており、前者の方が融合者率が高い。同じ「しろい」という形態素を持つ「白

い」と「面白い」とで融合の度合いに違いが見られるが、このことについては長野県を調査した馬瀬良雄（1996）の言及がある。県内 424 地点を調査したところ、融合形を使う地点数は、「白い」に比して「面白い」で増えるとする。本調査では地点数ではなく人数という点から調査しているが、同様の傾向が見られる点は注目される。さらに、反意語「黒い」で融合形を使う地点数は「白い」とほぼ同じであるという報告、また「太い」では融合形の地点数が増えるという報告は、本調査でも見られる傾向であり、これらの一致は大変興味深い。融合形使用の数値自体はおそらく地域ごとに異なろうが、序列関係については、地域間で広く共通性が認められる可能性がある。

3.3. 形容詞の連母音［ui］の融合

形容詞の連母音［ui］を［i：］とする融合者率は図３のとおりである。ここでも実際に問題にしているのは、語幹ではなく活用語尾である。

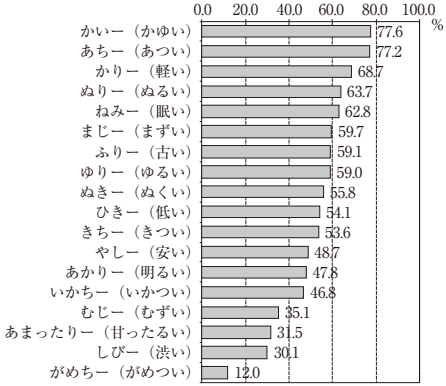

図3　形容詞の連母音［ui］の融合者率

まず語の日常性という観点から検討する。数値が最も低いのは「がめちー（がめつい）」(12.0%)である。語の意味は非常に否定的であるが、語の使用という点で考えると、特に若年層においては非日常的であろう。融合者率が非常に低くなっているのはそのためと考えられる。数値は少し高くなるが「いかちー（いかつい）」（46.8%）についても同様に考えることができよう。「むじー（むずい）」（35.1%）は「難しい」を元とする新語だが、俗語でもあるために一般的な使用となっておらず、別の意味で日常性が低い語であると言えよう。

語が持つ意味の肯定性／否定性という観点から検討すると、「かいー（かゆい）」（77.6%）と「あちー（あつい）」（77.2%）の数値の高さが注目される（「あつい」という表記は「厚い」とも解される不備があったが、「熱い」「暑い」の意味である）。いずれも不快感という否定的意味を持つ。「あつい」は「熱い」か「暑い」か識別できないが、いずれにせよ心地よさを表わすのであれば「あたたかい」であり、「あつい」は多くの場合そこから外れた感覚と言えよう。融合形が含意するぞんざいさと否定的

意味が調和するため数値が高いものと考えられる。

3.4. 形容詞型助動詞の連母音の融合

形容詞型助動詞の語尾の連母音の融合者率は図４のとおりである。ここでも実際に問題にしているのは、助動詞の語幹ではなく活用語尾である。調査した語数が少ないため、連母音の種類はまとめて示した。

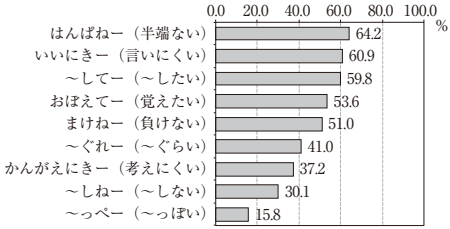

図4　形容詞型助動詞の連母音［ai/oi/ui］の融合者率

文法的機能を持つ語であるため、回答者には「～してー（～したい）」のようにやや抽象的な形で提示した項目も少なくない。そのため、動詞の中でもサ変動詞しかイメージされにくかったり、意味がわかりにくくなるという難点が生じた。そうした不備を含むデータであることに留意しつつ、結果を見てみる。

これによると、形容詞型助動詞も全般的に融合者率が高いことがわかる。連母音の融合は、形容詞だけでなく形容詞型助動詞にも盛んに見られる現象である。

数値が最も高い「はんぱねー（半端ない）」（64.2%）は「中途半端ではない」等を元とする短縮形の新語である。現実には全体で形容詞という意識で使っている人が少なくない可能性がある。若年層以外での使用は少ないと思われるが、若年層ではすでにかなり定着しているであろうことと、俗語であることに由来する表現としてのぞんざいさが､融合形が含意するぞんざいさと調和するため数値が高いものと考えられる。

一方､「～ぺー（～っぽい）」（15.8%）についてはその数値の低さが注目される。「～っぽい」は「湿っぽい」「安っぽい」のように若年層の間でも日常的によく使われる表現であろうし、新語でもない。この数値の低さが何に起因するのか、現在のところよく分からない。提示した表現がわかりにくかったため「使う」にチェックした回答者が少なかった可能性も考えられる。

3.5. 名詞の連母音の融合

名詞の連母音の融合者率は図５のとおりである。ここでも連母音の種類はまとめて示す。連母音の後半が［e］である語も含まれている。

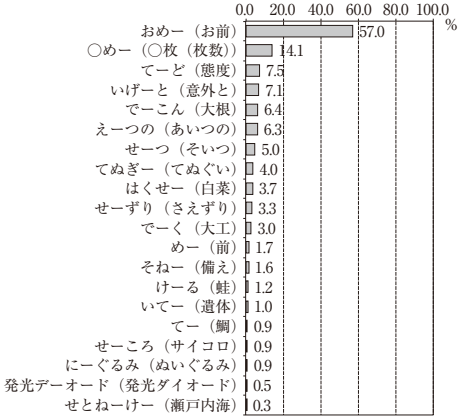

図5　名詞の連母音［ai/ae/oi/ui］の融合者率

形容詞や形容詞型助動詞と比べ、全般的に数値は著しく低い。「おめー（お前）」（57.0%）は例外的に数値が高いが（その理由は現在検討中）、それ以外は融合者率が極めて低く数パーセントに過ぎない。岡山の発音上の特徴を象徴的に示す「でーこん（大根）」も 6.4% にとどまる。若年層を中心とする現在の岡山では、名詞における連母音の融合はほとんど行われていないと言ってよい状況である。形容詞や形容詞型助動詞は、数値の違いこそあれ数パーセントという語はまれであることを考えると、品詞による違いは、形容詞や形容詞型助動詞は融合するが名詞は融合しないというカテゴリカルな違いにほぼなっていると言ってよい。

伝統的な岡山方言の特徴を一般向けに紹介した青山融（1998）によると、岡山では名詞内部で融合が生じるのみならず、「鼻へ」が「はねー」、「岡山へ」が「おかやめー」のように、名詞直後の助詞まで含めて融合が生じるとしている。本調査にはこうした項目はないが、名詞の融合者率が非常に低いことを考えると、現在の若年層の間ではそのような発音は一層使われていない可能性が高い。

品詞による融合の違いについて言及した先行研究はいくつかある。

室山敏昭氏の指導によるノートルダム清心女子大学方言研究会（1968）は、現在は備前地方に属するがかつては美作地方に属していた建部町（現・岡山市北区）において、高年層 4 名を対象に 1967 年に言語調査した結果を、談話の文字化資料とともに報告している。このうち連母音の融合については、それのない美作とそれのある備前の中間地域であることから、［ai］から［e：］への移行を示す［æ：］で実現されているとしているが、この融合形は、「コマェ（細かい）」「ヤオェー（柔らかい）」のような形容詞のみならず、「ハェータ（入った）」のような動詞や、「ニカェー（二階）」のような名詞にも見られるとする。半世紀近く前には、確かに形容詞以外でも融合形が用いられていたことが確認される。

山本泉（1984）は、岡山県における連母音［ai］の融合（同化）状況について、備

中・美作・備前の各地域から各一地点を選び、それぞれから10歳刻みで男女各1名、計18名、総計52名を対象に1972年に面接調査している。地域差と年齢差を把握することが研究の中心であったことから、品詞による傾向の違いについては言及まではしていないが、示された分析結果を見ると、連母音［ai］のまま発音した地域・人数は名詞において多く（特に「サイレン」「アイロン」「ナイロン」「ライオン」などの外来語）、逆に形容詞（「短い」「近い」「偉い」「うまい」など）において少ないという傾向が見られる。すなわち、本調査で得られた品詞による傾向の違いは、すでに約40年前からある程度見られたのではないかと考えられる。数値的な確認は難しいが、その違いの度合いが徐々に拡大し、現在のような品詞によるカテゴリカルな違いに近い状況にまで至った可能性が考えられる。

関連した現象は広島県でも見られる。神鳥武彦（1962）は、広島市の高年層の男女各20名と中学生の男女各20名、計80名を対象に、連母音［ai］の融合（ただし［aː］への融合）について1961年に調査した。それによると、形容詞は終止形・連体形が「ナー（無い）」「イター（痛い）」「アマー（甘い）」のように融合する語が多いのに対し、動詞は「カーマス（買います）」のようにはならず、漢語系の名詞も「サーフ（財布）」「マーニチ（毎日）」、副詞も「ターテー（たいてい）」のようにはならず、外来語（名詞）も同様であると言う。融合の形こそ異なるが、品詞による傾向の違いは、半世紀前の広島でも見られる。

以上を総合して考えると、かつてはさまざまな品詞において融合が見られたが、その初期段階からすでに品詞による傾向の違いの萌芽も認められ、それが徐々に拡大し、現在の特に若年層に見られるようなカテゴリカルな違いに至ったものと考えられる。

3.6. 副詞の連母音の融合

副詞の連母音の融合者率は図6のとおりである。連母音の種類はまとめて示す。

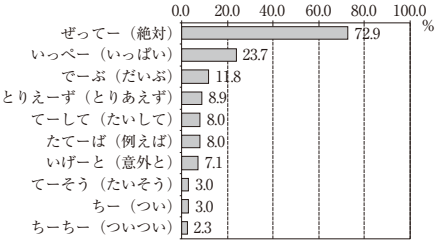

図6　副詞の連母音［ai/ae/oe/ui］の融合者率

「ぜってー（絶対）」（72.9%）と「いっぺー（いっぱい）」（23.7%）以外は数値が低く、名詞と似た状況である。「ぜってー（絶対）」と「いっぺー（いっぱい）」で数値が高いのは、いずれも状態を表わし得る語であることと、語末が［ai］であることから、形容詞のように意識して使われているためであろう。

3.7. 形容動詞の連母音の融合

形容動詞の連母音の融合者率は図７のとおりである。連母音の種類はまとめて示す。

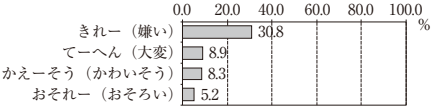

図7　形容動詞の連母音［ai/oi］の融合者率

「きれー（嫌い）」（30.8%）以外は数値が低く、名詞と似た状況である。「きれー（嫌い）」で数値が高いのは、形容動詞であるがゆえに状態を表わす語であり、かつ語末が［ai］であることから、形容詞のように意識して使っている人がいるためと考えられる。語形が形容詞に似ている形容動詞が形容詞として用いられることはときにある。関西方言の「綺麗だなあ」の「きれいなあ」、「綺麗だった」の「きれ（い）かった」などはその典型である。

3.8. 動詞の連母音の融合

動詞の連母音の融合者率は図８のとおりである。連母音の種類はまとめて示す。

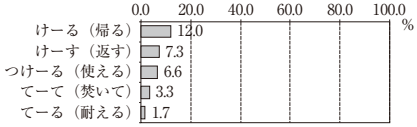

図8　動詞の連母音［ai/ae］の融合者率

動詞についても融合者率は低く、状況は名詞と同じである。

3.9. 動詞型補助動詞の連母音の融合

動詞型補助動詞の連母音の融合者率は図９のとおりである。連母音は［ai］のみである。

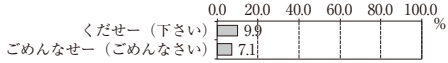

図9　動詞型補助動詞の連母音［ai］の融合者率

動詞型補助動詞についても融合者率は低く、状況は名詞と同じである。なお、融合が生じ得る連母音の位置が語末である点は形容詞と同じであるにもかかわらず、数値がこれだけ低いのは不思議である。「下さい」は「くれ」と比べて尊敬語を含む表現であること、「ごめんなさい」も丁寧な謝罪表現であることを考えると、融合形が含意するぞんざいさと調和しないことがその要因となっている可能性が考えられる。

六一

4. まとめ

以上、品詞別に調査結果を検討した。

明確に言えるのは、品詞により融合者率に違いがあるということである。形容詞や

形容詞型助動詞は融合者率が高いのに対し、名詞・動詞・形容動詞・副詞・動詞型助動詞の融合者率は著しく低い。その結果、融合するか否かは、品詞によるカテゴリカルな違いに非常に近いものとなっている。なお、形容動詞や副詞でも、状態性を表わしかつ語形が［ei］や［ai］で終わることから形容詞のように意識されやすい語は、例外的に融合者率が高い。

品詞による融合の違いについて明確に言及した研究もわずかながらある。連母音の融合が盛んな埼玉県の状況を報告した井上史雄（1984）は、形容詞活用語尾や助動詞活用語尾（「行きたい」や「見ない」など）では融合させて発音する地域が広いが、動詞語幹、名詞等の不変化語、動詞活用形（「書いた」「咲いた」など）は後者になるほどその地域が狭くなるとしている。融合者率ではなく地域範囲の広狭からではあるが、形容詞や形容詞型助動詞（厳密にはそれぞれの活用語尾）で最も融合が盛んであるという点は、本調査の結果と一致する。

形容詞・形容詞型助動詞の活用語尾でなぜ現在でも融合が盛んに行われているのかの説明まで踏み込んだ先行研究は見当たらない。語彙的意味を担う語幹において融合が生じると語形の変形が目立つのに対し、形容詞や形容詞型助動詞であることだけを示す活用語尾において融合が生じるのは、いろいろな語に共通する現象であることも加わり相対的に目立たないということが、こうした違いを生じさせる要因となっている可能性が考えられる。ただしまだ確証は得てはおらず、検討は現在継続中である。

他の品詞よりも融合者率が高い形容詞・形容詞型助動詞の中でも、数値に違いがある。それぞれの語が持つ日常性や、それと関連する面も持つ品位を中心とする語のニュアンス、そして語形などがその要因となっている可能性が考えられる。否定的な意味やニュアンスを持つ語は、融合形が含意するぞんざいさと調和するため融合者率の数値が高くなる。一方、やや詩的で多少雅語化した語や最近作られた造語は、日常での使用が低いため融合者率も低くなる。語形による要因としては、現在のところその原因はわからないものの、直前が子音を伴わない「あ」である場合は融合者率が低くなる傾向が認められる。

本稿で分析対象としたデータはいろいろな点で不備があるが、若年層を中心とする多人数から回答が得られたことから、現在の岡山における連母音の融合形の使用状況について、品詞による違い、形容詞・形容詞型助動詞における語による傾向の違いとその要因について、ある程度明らかにすることができた。ただし、融合者率そのものは、今回の調査のサンプリング計画の制約から、実態を正確に示しているという保証はない。今後は、調査対象とする母集団をまずきちんと定めた上で、抽出の代表性を確保すべくアンケートの回答者を無作為に多人数抽出して調査することで、数値的な精度を高めてゆくことを課題としたい。

参考文献

青山融（1998）『岡山弁 JAGA!』（アス）
井上史雄（1984）「埼玉県の方言」『講座方言学５　関東地方の方言』（国書刊行会）
上野善道編（1989）『日本方言音韻総覧』（小学館、非売品）

神鳥武彦（1962）「広島市方言における〔ai〕連母音」『国文学巧』27
聶星超（2006）『「連母音の融合」と男女差の関係における調査研究－主に若者を中心に』（北京外国語大学修士論文）
ノートルダム清心女子大学方言研究会（1968）『生活語研究』3
馬瀬良雄（1996）「長野県方言における連母音の融合・非融合―連母音 oi、oe、ui を中心に―」『音声学会会報』212
山本泉（1984）「岡山県における〔ai〕連母音の諸相―言語年層的研究―」『くらしのことば』1
吉田健二（1992）「埼玉県東部方言の音韻の性格―母音の問題を中心に―」『国文学研究』108

付記

本稿で報告した調査結果の一部については、本学日本語日本文学科ブログ「日本語日本文学科　リレーエッセイ」の第 95 回「でーこんてーてーて」（2011 年 9 月 1 日掲載）でも紹介している。また、2011 年 9 月 25 日付の『山陽新聞』（「くらし」面）でも調査結果の一部が紹介されている。

（おざき　よしみつ／本学教授）

五九